

ヨーゼフ・ロートの『サヴォイホテル』

佐藤 方 代*

über Joseph Roths Roman „Hotel Savoy“

Michiyo SATO*

はじめに

ヨーゼフ・ロートの『サヴォイホテル』は、1924年に最初の単行本として出版された作品である。同じ出版社シュミーデ（ベルリン）から、同じ年に『反乱』も出版された¹⁾。両作品とも、刊行にさきだってフランクフルター・ツァイトゥング紙に連載されている。その前年に『蜘蛛の巣』が、ウィーンのアルバイター・ツァイトゥング紙に連載されたものの、単行本としては刊行されていない。第一次大戦直後からジャーナリストとして本格的な活動を続けていたロートは、この『サヴォイホテル』によって作家としての評価を確かなものとしたのである。

『サヴォイホテル』はその後のロートの作品にくりかえし表れるテーマが基調となっている。そのテーマの一つは東ヨーロッパとのかかわりであり、もう一つはどこにも所属せず、所属する基盤をもたない人物のありようである。いずれのテーマも、ロートが19世紀末にガリツィアでユダヤ人として生まれ育ったことに深く結びついているものと考えられる。本稿では、『サヴォイホテル』の内容をやや詳しくたどって、この物語りのなかに表現されているこれらのテーマを浮かび上がらせ、その背景となるものを探ってみたいと思う。ロートが表現した世界を読み解くための基本となる試みの一つであると考えられるからである。

第1部のあらすじ

この小説は、東ヨーロッパのある都市にしばらく足を止めた帰還兵、ガブリエル・ダーンが、一人称で語る構成になっている。

ダーンは、第一次大戦後3年間捕虜として抑留され、その後もロシアの村や町を放浪して、5年ぶりによく「ヨーロッパの入り口²⁾」であるこの町にたどり着いたのである。ここには金持ちの伯父フェーブス・ペーラウクが住んでいて、ダーンはこのさき帰郷の旅を続ける費用を、その伯父に出してもらうことを期待している。そして「2、3あるいは1週間ほど休養する³⁾」

*外国語教室 (Department of Foreign Languages)

ために「サヴォイホテル」に滞在するつもりである。

サヴォイホテルは「東方の他のどんな宿よりもヨーロッパ風に思われる⁴⁾」ホテルである。8階建てで「水や、石鹸や、英国式便所や、エレベーターや、白い帽子を被ったルームメイドが約束され⁵⁾」部屋数は864室だった。ダーンは安い7階の部屋に入った。4階から下の階は設備も立派で掃除もゆきとどいた金持ちのための部屋だった。上の階ほど安く、貧しい人たちが逗留している。最上階には、洗濯場の蒸気が立ちこめ、寄席の踊り子であるスターシャや道化師のサンツィン一家などが住んでいる。富くじの当たり番号を夢に見るという不思議な能力をもったフィッシュが最上階の最後の部屋864号室に住み、下の階の金持ちに部屋代を払ってもらっている。上の階の貧しい客が部屋代を払えないと、エレベーターボーイのイグナーツがトランクを担保にして、支払いの肩代わりをするのだった。ときどきホテルの主人カレグロプロスが視察に来るというので、従業員たちが緊張した様子をみせるが、だれも彼を知らず、彼の姿を見た者もいなかった。奇妙なことの多いこのホテルのなかでも、もっとも謎めいた人物である。

ダーンからみて「このサヴォイホテルは世界そのもののよう⁶⁾」だった。「そとに向けては強力な光彩を放ち、八つの階は豪華に輝いて見えたが、内部では貧乏が天近く、上層の階に住みつき、・・・下の階でのんびりと気もちよく腰を下ろしている満ち足りた人たちの快適な部屋の上に、こうした墓がいく重にも積み上げられていた。⁷⁾」

19世紀ヨーロッパの都会における典型的な集合住宅は、下の階に金持ちが住み、上の階に下層の人びとが住む構造になっている。ヨーロッパ12ヶ国で共同して作られた共通教科書『ヨーロッパの歴史』にもそのような1850年頃のパリの住宅の絵が、典型的な住居として示され、「バルコニーのある2階に金持ち、3階に富裕な若夫婦、4階に猫と借金取り、5階は失業者や芸人などのために使われた⁸⁾」という説明が付してある。サヴォイホテルはこうした典型的な西ヨーロッパの場合と同じように構成されているのである。

ダーンの両親はロシア系のユダヤ人で、ウィーンのレオポルトシュタットに住んでいたのだが、父は老人ホームで、母はサナトリウムで亡くなった。レオポルトシュタットはウィーン第2区にあたる市門の外の地区で、東方からウィーンに流れ込んだユダヤ人が住みつく所である。ロート自身も生まれ故郷のガリツィアからウィーンに出てきてレオポルトシュタットに住んでいたし、妻のフリーデリーケはそこの生まれだった。エッセイ集『放浪のユダヤ人』の「ウィーン」の章は、「ウィーンにやって来る東欧ユダヤ人は、・・・レオポルトシュタットに住みつく⁹⁾」という書き出しではじまっている。

『サヴォイホテル』にもどろう。

ダーンが伯父の家を訪ねると、いとこのアレクサンダーがパリの大学から休暇で帰って来ていた。伯父はダーンに背広をくれただけだった。しかしダーンは、一日も早く故郷へ帰りたいとは思っていない。そもそも帰る故郷などないのだ。伯父が金を出してくれそうになくても、先を急いであせるわけでもない。伯父の家を訪問し、外貨のブローカーと知り合いになって、ユダヤ人の住む地区を散歩したり、サヴォイホテルのバーで時を過したりした。バーでは、この町の裕福

な階層の人びとである工場主らが酒を飲み裸の娘たちの踊りに興じていた。そこで一人の客が「ブルームフィールドが今日ベルリンに来ている」と皆に知らせた。バーに集まる裕福な工場主も、最上階の住人フィッシュも、皆が「ブルームフィールドの到来」を待ち望んでいる。ブルームフィールドはこの土地出身のアメリカ人で、何でもかなえてくれる救世主のように思われていた。彼の父親は、かつてこの土地に住みドイツ名でブルーメンフェルトと呼ばれるユダヤ人であったのだった。

間もなく8階のサンツィンが突然病気になるて死んでしまう。ダーンはスターシャといっしょに彼を看取り、墓地の奥のほうの寂しい片隅に埋葬した。その帰途に一人で街はずれを歩き回って夜遅くホテルに帰ると、「サヴォイホテルは空っぽのように思われた。・・・ぼくはサンツィンについて一体何を知っているだろう。彼は芝居小屋の道化だった。そして家では悲しげで、心温かく、しかも武骨だった。彼は洗濯室の蒸気で息をつまらせた。何年間も汚い、他人の洗濯物の匂いを吸っていたのだ。¹⁰⁾・・・世界のあらゆる都市に大小さまざまなサヴォイホテルがあった。そして一番上の階にはどこでもサンツィンのような者たちが住み、他人の洗濯物の蒸気で息をつまらせているのだ。」そして「ある者はそこで生き、また別の者はそこで死ぬこのホテルにたいして、ぼくは憎しみが込み上げてくるを感じた¹¹⁾」のだった。

ホテルは満室だった。いとこのアレクサンダーが、ダーンの泊まっている部屋をラヴホテル用に確保したいので譲ってくれないかと頼みに来た。そのかわりヴィーンへでも、ベルリンへでも、パリへでも、旅費を提供するので出発しないかと言うのである。ダーンは、伯父の親切を当てにしなくても旅費が手に入り「難問はたちまち解決¹²⁾」し「二つ返事で同意すべきだった¹³⁾」にもかかわらず、考えこんでしまう。「遅すぎたような気がした¹⁴⁾」のである。それまでは、スターシャの誘いに気付かぬような対応をし、「ぼくはスターシャの魅力に迷ってここにとどまるようなことはしないだろう、と考え¹⁶⁾」ていた彼が、「カレグロブロス一人のため」その秘密を知るためだけにでも長く留まりたい、などと感じていた。ダーンはサヴォイホテルに対するアンビバレントな感情に揺れ動く。一方で「旅を続けねばならない。・・・みんな世界に向けて旅だっていくのだ¹⁷⁾」としながら、アレクサンダーに対して「きっぱりと『ぼくは決して旅には出ない。』¹⁸⁾」と答えてしまうのだった。ダーンはこの謎めいたホテルにひきつけられていた。

出発をとり止めたダーンは「再び見出した故郷のように、自分の部屋に入った¹⁹⁾」のだった。ダーンは「旅を続けなければならない」と自分に言い聞かせるが、めざす故郷や目的地があるわけではない。「母も、妻も、子供もいやしない。誰もぼくを待ち受けてはいないのだ。²⁰⁾」ヴァンベルクの言う「故郷なき帰還者²¹⁾」である。

以上が第1部(1～13章)のあらすじであり、物語りの進行につれて、「サヴォイホテル」が形づくる空間とそこに暮らす人びとの状況が詳しく語られる。背景に道路や広場や街角の匂い、工場の煙突から出る煤煙、ユダヤ人地区の狭い横丁など、このホテルの位置する都市の様相が、ルポルタージュ風に描き出されている。

第2部

出発を取り止めたダーンは毎日駅に行って仕事を捜す。そこでかつての戦友であるクロアチア人スヴォニミール・パンシンと出会った。パンシンもやはりロシアから帰還して来たのである。彼はダーンの部屋に同居する。すべてに消極的なダーンと対照的に行動的なパンシンは、「騒ぎが好きな扇動家²²⁾」である。ダーンとは違って、郷里に父親も二人の弟もいるのだが、ストライキが気に入って「ここで革命を起こそう²³⁾」と言って留まることにする。彼は、「無定見な男だが、しかし誠実だ。そして自分の革命を信じている。²⁴⁾」ダーンは「ストライキをしている労働者はほんと何の関係もない。ぼくは群衆にも個人にもなんら連帯感を抱いていない²⁵⁾」と思いつつ、パンシンと話していると落ち着かなくなる。「人は誰でもみな協力し合って生きているのだ²⁶⁾」などと単純に言われると、自分もサヴォイホテルの上の階の貧しい住人との間に連帯感を感じるのだった。

パンシンはもともと農民だった。「彼の体内には農民の血が流れている。・・・雨と太陽を前もって感じ、遠くの火事を嗅ぎつけ、予感と夢を抱いている。²⁷⁾」そして、ホテルに泊まることのできない帰還兵たちがたむろしている小屋へ毎日出かけていく。「小屋が畑の近くにあり、スヴォニミールの魂が故郷の畑の穀物の束や、大鎌や、かかしに憧れていたからだ。²⁸⁾」一方で彼は軍隊時代からアメリカに憧れ、「アメリカ」と言うのが好きだった。「糧食がいいと、彼は『アメリカ!』と言った。陣地がうまく構築されると、かれは『アメリカ』と言った。『洗練された』中尉のことは彼を『アメリカ』といった。そして・・・ぼくの命中弾を彼は『アメリカ』と言った。²⁹⁾」という調子である。

パンシンは、ダーンが腹を立てたり不審に思ったりしたホテルの仕組みに何の疑いも抱かず、「素晴らしいホテルだ」といって満足している。誰にでも話しかけ、看板を描いている風刺漫画家、俳優、帳簿係などさまざまな滞在者たちと知り合いになった。ホテル中をあちこち歩き回り、調理場にいたるまですべての人を知ってしまう。バーで傍若無人に振る舞うので常連客はいやな顔をするが一向に平気だった。一方で、ストライキ中の労働者や帰還兵たちの集まるところへ出かけて行って、サヴォイホテルのバーで裸の娘たちを眺めて酒を飲んでいる工場主たちのありさまや哀れなサンツインの死のようすを話して聞かせ、彼らの闘争心を煽った。

パンシンについてダーンは、「彼は健康な人間だ。ぼくは彼が羨ましい。ぼくたちのレオポルトシュタットにはこんなに健康な奴は一人もいなかった。彼は野卑な言動を楽しんでいる。彼は女性を尊敬しない。本をまったく知らない。新聞を全然読まない。世界で何が起きているか知らない。」と言う。[しかし彼はぼくの真の友人だ。彼は自分の金をほんと分かち合う。そしていざとなれば命だって分かち合ってくれるだろう。／ぼくもまったく同じようにするだろう。³⁰⁾」と感じているのである。

パンシンという対照的な人物が現れたことで、語り手ダーンの人物像も明確になってくる。ダーンは「以前は作家になろうとしたことがあったけれど、戦争に行き、今ではものを書いても意味

がないと思っている³¹⁾」が、ギリシャ人名「カレグロプロス」を見るとギリシャ語の語尾変化を思い出す³²⁾。上の階に住んでいても踊り子のスターシャから「あなたは全然別の世界の人だわ³³⁾」と言われるのだった。パンシンに向かって「共同体を支持する感情はこれっぽっちも持っていない」と言い「インテリのことばは破廉恥だ³⁴⁾」と非難される。ヴンベルクは「この小説の主人公は、すべてを物語るガブリエル・ダーンでもなく、スヴォニミール・パンシンでもない。異質な兄弟のような二人が主人公なのだ。³⁵⁾」と指摘している。

ダーンとパンシンは駅で一緒にホップの袋を運んで金を稼ぎ、ときどき貧民救済食堂で食べた。帰還兵の数はますます増えて町にあふれ、労働者たちのストライキが続いている。そんな中で皆があいかわらずブルームフィールドを待っていたが、一向に現れなかった。

第3部

第3部は、ブルームフィールドが前ぶれもなくある夜とつぜん到着する場面から始まる。プラハ出身のユダヤ人、ボンディを秘書として伴って、鉄道ではなく、アメリカ製の高級自動車に乗って夜中の2時にサヴォイホテルへ到着した。

ダーンは、ブルームフィールドのもとへ集まってくる大勢の客に対応するために、彼の秘書として働くことになる。「ぼくはヘンリー・ブルームフィールドという神様の玄関に座して、彼を頼って来る貧しい庶民の祈りと願いを記録した。・・・ブルームフィールドは2、3週間滞在するつもりだった——そして3日後には、本来なら少なくとも10年はここに留まっていなければならないことが、ぼくにはわかった。³⁶⁾」

しかしながら、ブルームフィールドはこの地で期待されているような役割を果たすためにやって来たわけではなかった。ダーンが日曜日にサンツィンの墓に出かけると、貧しいユダヤ人たちが、「裕福なユダヤ人たちのお慈悲にすがって生きている乞食たち³⁷⁾」がユダヤ人墓地に集まっていた。今日はブルームフィールドの父親ブルーメンフェルトの命日で、息子が墓参りに来るのを待っているのだ。「誰も彼もみんな、彼は金のためか、工場のために来たのだらうと思っている。乞食たちだけがブルームフィールドの旅行の目的を知っていたのだ。³⁸⁾」

第4部

最後の第4部は短く、サヴォイホテルが焼失してしまう事件が語られる。

「広大なロシアが吐き出す³⁹⁾」帰還兵の数はさらに多く洪水のように押し寄せた。一方、繊維工場ではストライキが続いて町が不穏な空気に包まれる。そんな中でブルームフィールドは突然こっそりと去って行った。ダーンには十分な報酬が残ってあった。

労働者の一人がホテルに爆弾を投げ込んだためドアマンが死に、イグナーツが警官を呼んだのをきっかけにホテルの近くは騒然とした状態に陥った。軍隊が出動し、ダーンの目の前でサヴォ

イホテルは炎につつまれた。支配人が最上階を指差し、「カレグロプロスが逃げようとしなさい」と叫ぶ。そこにイグナーツの姿が見えてまた消え、そのままホテルは焼け落ちてしまう。イグナーツこそがカレグロプロスだったのだ。大勢の死者が出た。パンシンも騒ぎに巻き込まれて命を落としたらしい。

次の日、残骸となったホテルを後にしたダーンが、帰還兵たちを運ぶ鈍行列車で出発するところでこの物語りは終わっている。

以上のように、この作品は4部からなり、第1部は語り手のダーンが出発を取り止めて滞在し続けることになるまでを描き、サヴォイホテルそのものの記述が主要な部分を占めている。第2部はスヴォニミール・パンシン、第3部はブルームフィールドの形姿が、描写の中心となっている。第4部で、ホテルもパンシンもブルームフィールドも姿を消し、ダーンはどこへともなく出発する。

ホテル、境界の地

ロートの親友だったヨーゼフ・ヴィトリンは「『サヴォイホテル』は、ロッシュとそこにある実在のサヴォイホテルが下敷きになっている。⁴⁰⁾」と述べている。

ロッシュ（またはロッツ、ポーランド名はウッジ）は19世紀後半に繊維工業によって発展した都市で、ポーランドにおける産業の中心地である。1820年には未だ1000人ほどの村にすぎなかったが、ザクセンやポーゼン、シュレージェンやボヘミアなどから繊維業関係のドイツ人が流入して、19世紀の後半には急速に人口が増加し、「ポーランドのマンチェスター」と呼ばれるようになった。

ロッシュについて、ロートは1928年7月19日のフランクフルター・ツァイトUNG紙に『ロシアの残骸——ロッツにおける繊維工業』と題するルポルタージュを書いている。その中でたとえば「私はこの町を戦争のときに知った。大急ぎで通ることができただけだったが、戦時中の東の町のどこよりも固有の雰囲気をよく保っていたことを思い出す・・・ここでは粗悪な衣料品が生産され、ヨーロッパ文明のシンボルとして、広大なロシアの、半ば未開のさまざまな民族、種族に対する前哨地の役割を果たしたのである。・・・工場が建って煙突と工場主たちが増えて都市は大きくなった。とつぜん50万の人口（40%がポーランド人、35%がユダヤ人、25%がドイツ人）を数えるようになったのだ。しかし誰も——ここから多額の税収を得た国家も——ロッツに運河を造る気はなかった⁴¹⁾」と詳しい状況を記している。

『サヴォイホテル』には都市の固有名は示されていないが、工場の煙突が煤煙を吐き、織物工業とストライキが描かれ、「運河がないために悪臭が町に漂う」など、町の細部の描写は上気のルポルタージュの記述と重なる。あるいはまた、「神は産業をもってこの都市を罰したもうた⁴²⁾」というような、急速に膨張した工業都市を思わせる表現もロッシュのイメージにつながっている。しかしこれらはすべてサヴォイホテルの背景にある風景として描かれているに過ぎないのであ

て、「ポーランド最大の工業都市」がこの作品の舞台を特徴づけているとはいえない。「前面の舞台装置は決してはっきりとしたポーランド的なものではない⁴³⁾」のである。

ヴィトリンも「この魅惑的な散文は・・・ヴォルヒニアの雰囲気をもっている。その土地は私たち二人のどちらにとっても程度の差はあれ故郷である素晴らしい地域である。古いロシアとの国境の近く、ロートがとくに魅きつけられていたことを強調しておきたい。ふたつの異なる世界の境界にあることと、そこに住む秘密に満ちた人びとが彼の心をひきつけた。⁴⁴⁾」と述べている。「古いロシアの国境近く」とはヨーロッパの東端、オーストリア・ハンガリー帝国の辺境を意味している。ロートもヴィトリンも、東の境界地域であるガリツィアで生まれ、高校時代までを過ごしたのである。

『サヴォイホテル』の登場人物をみると、語り手のダーンをはじめとするさまざまな階層のユダヤ人、年老いたエレベーターボーイのイグナーツ、クロアチア人のパンシン、スターシャのようなスラブ人などさまざまな民族が入り交じっている。そしてダーンが最初の夜に道をたずねたとき「警官はドイツ語を話した。ここではドイツ語を話す人が多かった。ドイツ人の工場主、技術者、商人たちがこの都市の社交界や取引や企業を牛耳っていた。⁴⁵⁾」これはまさにロートが生まれたガリツィアのようなオーストリア・ハンガリー帝国の東端の地域でみられる光景にほかならない。「サヴォイホテル」はヨーロッパの入り口にあってヨーロッパとロシアの両方に接し、この土地で長く暮らすひとと外からやって来たひとと逗留している。ダーンがこのホテルに対して抱くようになった愛着は、ロートの生まれ故郷である東ヨーロッパへの近親感を反映しているのではないだろうか。国境に近い都市の一つを具体的にモデルとして描くかわりに、「サヴォイホテル」そのものが、異なる世界が交わる空間の表現となっている。

このようにホテルを舞台にした人間模様が物語りの中心をなしているのは、「ロートの小説は同時代の問題をホテルの姿のうちに、いわば並列の舞台に表わそうとする試み⁴⁶⁾」とみることができる。ホテルという場は「故郷なき者の造られた故郷⁴⁷⁾」となっているのである。

ロート自身、第1次大戦直後に文筆活動を始めてからはほとんどの日々をホテルで過ごした。1922年3月にフリードルと結婚してベルリンに移ったとき、生涯一度だけ自身の住居を構えて約1年間暮らしたものの、1923年6月にはヴィーンに帰り、ふたたびベルリンに戻ったときはツォーのホテルに滞在するようになった。その後はずっとホテルで過ごし、ホテルについていくつかのエッセイも書いている。たとえば『ホテル世界』（フランクフルターツァイトゥング紙、1929年1月～2月）は、「私が祖国のように愛するホテルは、ヨーロッパの大きな港町の一つにあって・・・他の男たちが家庭へ、女房と子供のもとへ帰るように、私は灯りやロビー、部屋係のメードやポーターのもとへ帰還する⁴⁸⁾」という書き出しで始まり、『ホテルへの到着』、『ポーター』など7つの小篇からなり、ホテルで出会った人びとや事物への愛着を綴ったエッセイである。

最初の長編小説である『サヴォイホテル』は、どこにも堅固な地盤をもつことなく、ホテルを造られた故郷とした作者のその後の人生を予感しているともいえよう。

帰還兵

物語りのなかでは、帰還兵たちがロシアやシベリアからつぎつぎと流れ込んでくる。それもまた第一次大戦後の国境近い町では日常的な出来事であった。そうした情景を描写するダーンの口調は、ときにより異なる響きを帯びている。「彼等は外国のいろんな国や生活について知っており、はくと同じようにいろんな生活を渡り歩いて来たのだ。彼等は浮浪者なのだ。果たして帰国の旅を喜んでいるのだろうか。小さな故郷の、妻子や暖かい暖炉のもとへ帰るかわりに、むしろ大きな故郷に留まっていたかったのではなかろうか。ひょっとすると、帰国するのは彼らの意思ではないのかもしれない。彼らはきまった季節にやって来る魚のように西へ押し流されて来るのだ。⁴⁹⁾」

「彼らは大量に灰色を、果てしない灰色を、この灰色の都市一面に放出している。……憧れに、故郷に対する埋もれた思い出に、前へ前へと急ぎ立てられる彼らからは、大きな郷愁が発散している。⁵⁰⁾」

このように、帰還兵の群れを眺めてダーンは、あるときは故郷への帰還を躊躇する気持ちを見だし、あるときは人びとを故郷へと駆り立てる郷愁を感じ取るが、彼らのうちに帰郷の喜びは見えていない。作者の西に対するアンビバレントな気持ちの投影であろうか。

帰るところのない帰還兵、あるいは故郷へ帰ることを望まない帰還兵は、ロートの作品に繰り返し登場する。ロート自身が第一次大戦中は東部戦線に参戦し、戦後に一度郷里のガリツィアを訪れたものの、ウクライナ軍に編入されるのを恐れて、南スラブを迂回し苦勞してヴィーンに戻った経験をもっている。第一次大戦後オーストリア・ハンガリー帝国の辺境地域出身の兵が帰還すべき郷里は、帝国の崩壊によって大きく姿を変えていた。ロートの出生地であるガリツィアの場合、ウクライナ領となった地域のウクライナ人、ポーランド領となった地域のポーランド人であればそれぞれ自民族の主導する国家が成立したわけで、民族自決の理念に基づいて独立を果たした自分の国へ帰ることになったのである。しかし、それらの地域出身の「東欧ユダヤ人」として事情は非常に複雑で困難なものであった。

ここで、第一次大戦当時の「東欧ユダヤ人」をごく簡単に眺めておこう。

「東欧ユダヤ人」には、オーストリア・ハンガリー帝国領内のユダヤ人と、ロシアやポーランドのユダヤ人が含まれる。

このうちオーストリア・ユダヤ人は、同化による解放の道を歩んできた。それら同化ユダヤ人が、世紀末ヴィーン文化の創り手としても享受者としても大きな役割を担ったことはよく知られている。ロートもはやくから同化の方向を選択していた。高校を出た後、はじめはレンベルク大学に籍を置いたロートは、ポーランド民族主義の高揚によるポーランド語の優勢な状況になじめず、すぐにヴィーン大学に転じている。オーストリア（ドイツ）の同化ユダヤ人としての、ドイツ語による文筆家をめざしていたのである。

一方、「ロシアやポーランドのユダヤ人は、第一次世界大戦の前から、流民化寸前の状態に追

込まれていた。⁵¹⁾」そして、第一次大戦期のロシア、とくにウクライナと白ロシアでポグロムが頻発し、また戦後の「独立ポーランドでもポーランド・ナショナリズムが激しい反ユダヤ主義となって現れ⁵²⁾」たため難民となってドイツ、オーストリアに流入した。この「難民問題」は、同化によって反ユダヤ主義の圧迫から解放される方向に向かっていて西欧ユダヤ人に大きな影響を与えずにはいなかった。ことに「一般のドイツ人の目には、ロシアやポーランドのユダヤ人も、ハプスブルク帝国領内ガリツィアのユダヤ人も、同じ「東欧ユダヤ人」であり、あらたな反ユダヤ主義を引き起こす結果となった。⁵³⁾」それが同化による解放の可能性を破綻させた原因の一つを見られているのであるが、そうした問題には本稿では立ち入らない。

『サヴォイホテル』のガブリエル・ダーンは、東欧ユダヤ人の息子である。「両親がロシア系ユダヤ人でウィーンのレオポルドシュタットに住んでいた」という設定は、上記の東欧ユダヤ人の二つにカテゴリーのどちらを出自とするのかさだかではない。ダーン自身は同化したインテリであり、当然のこととして、もはや東欧のユダヤ的世界と結びついてはいない。かといって西ヨーロッパのどこにも、属すべき場所を確保してはいないのである。ダーンと同じように、『反乱』(1924)のアンドレアス・プム、『果てしなき逃走』(1927)のフランツ・トゥングなどもこうした背景を背負った「故郷なき帰還者」である。彼らの姿には、ロート自身の運命が二重写しに見える。

ロートは、ヨーロッパの東の境界から出発して、最後は亡命の果てにヨーロッパの西の端、パリに到達した。東欧ユダヤ人の心情を綴った『放浪のユダヤ人』に、パリは「東欧ユダヤ人が何一つ不自由なく暮らしている⁵⁴⁾」として好意に満ちた調子で描き出されている。ベルリンについて「東欧ユダヤ人は誰一人として自ら進んでベルリンへ行こうとはしない⁵⁵⁾」と述べているのと対照的である。「ベルリンには喜びがない。しかしパリには喜びがあふれている。⁵⁶⁾」というような対比がいくつか示される。後年ロートの作品集を編集したヘルマン・ケステンは、「私はベルリンやニース、ブリュッセル、オストエンデ、マルセーユなどで彼と食事をしたにもかかわらず、ロートはパリの人間であるように思えた。故郷というものがあるなら、彼にとってパリがそれだった。⁵⁷⁾」と記している。「はじめは・・・「オテル・フォワイオ」に、そして最後には、その古いホテルが取りこわされたので、向かい側の小さいホテル兼カフェ、リュエ・ド・トゥルノンにある「オテル・ド・ラ・ポスト」に滞在していた⁵⁸⁾」ことはよく知られている。これらパリの常宿がロートの「造られた故郷」であったのかもしれない。ロートはアメリカへの脱出を拒んで、第二次大戦の直前に世を去った。彼の活動は両大戦の間の期間とぴったり重なっている。「若きヴィーン」を形成したユダヤ系の作家たちのように世紀末ヴィーン文化の担い手となるには遅すぎる時期に生まれ、時間的にも確かな足場をもたない世代である。

郷愁

『放浪のユダヤ人』には、ロートがパリでイディッシュ語の芝居を見たときの挿話が記されて

いる。そこには、フランス語しか話さない若いユダヤ人の女性が何人か来ていた。彼女らはすべての点でフランス的で、ロートは「民族の同化は婦人たちから始まるものである⁵⁹⁾」という感想をつけ加えたほどだった。ところが芝居の中でロシア・イディッシュの歌と踊りが登場したとき、これらの観客が郷愁の念にかられて涙を長すのをみて「郷愁の念がかくも彼らを感動させるとは、わたしはまったく知らなかったのだ⁶⁰⁾」と書き記している。

『サヴォイホテル』でも「郷愁」のイメージはつぎのように印象的なモチーフとして使われている。

帰還兵たちの集まる小屋で「各人それぞれ故郷の歌をうたい、しかもみんな同じように聞こえるのだ。チェコの歌とドイツの歌、ポーランドの歌とセルビアの歌、そしてすべての中に同じ悲しみがこもり、すべての声は同じように囁れ、・・・それでいて、メロディーはとても美しく聞こえる。ときおり古く醜い手回しオルガンの音がとても美しいことがあるように⁶¹⁾」あるいは、「彼、つまり農民のスヴォニミール・パンシンは夕方帰って来て、大きな憧れと、胸に抱き続けてきた郷愁とを持って来る。かれはぼくの心に憧れを呼び覚ます。そして彼の憧れは畑、ぼくの憧れは街と違いはあるものの、彼はぼくに憧れを植えつける。それは故郷の場合と同じだ⁶²⁾」という描写の甘い情緒的な調子は、物語全体が淡々とした文体で綴られているだけに、「郷愁」という言葉に対する作者の思い入れを感じさせるのである。

ダーンは、ブルームフィールドの中に郷愁の念を見出したとき、彼を心から理解する。墓地で偶然出会った場面のことである。ダーンは、ブルームフィールドが一人で、しかも歩いて墓地までやって来て父親の墓前に立って涙を流すのを目撃する。ブルームフィールドはダーンにむかってつぎのように語った・「私は毎年ここへ来るのです、父を訪ねて。この町も忘れることができません。私は東欧ユダヤ人です。そして私たちの故人がいるところは、どこもみな私たちの故郷です。もし父がアメリカで死んでいたとすれば、ぼくは完全にアメリカを郷里にすることができたでしょう。私の息子は完全なアメリカ人になるでしょう。というのも、私はアメリカに葬られるでしょうから。⁶³⁾」ダーンはそれまでブルームフィールドが何故ここにやって来たのかかわからず不審を抱いていたのであるが、この場面では彼の気持ちがよくわかったのであった。「ぼくやスヴォニミール（パンシン）と同じように、彼も郷愁の念を抱いていたのだ。⁶⁴⁾」

おわりに

東欧ユダヤ人の住む世界は多民族が混在する土地である。現在に至るまで解決をみない「民族問題」とそこから派生する難民の問題は、ロート文学の基層をなすテーマである。ロートが生みだした、どこにも所属する場をもたぬ人物たちは、そのテーマを前にして、問題を解く鍵となりうるのか、無力感の現われにすぎないのか、答は示されていない。

『サヴォイホテル』のダーンが、多民族・多文化の世界で、異質のアイデンティティーを抱えた人びとと、つかの間にせよ、たがいに心を通わすとき、郷愁という共通の情感が立ち現われる。

郷愁の行方はそれぞれ異なっていて、多くは向かうべき方向を見失っている。そうした背景の中で、ロートはただ、異なる言葉を話す人びとを同じメロディーに包みこんで融和させる「郷愁」を描いてみせる。その描写の美しさは、上記の人物たちの姿とともにロートの作品のもつ大きな魅力なのである。

注

ロートの作品のテキストは、Joseph Roth : Werke, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Klaus Westermann, Bde.6, Köln(Kiepenheuer & Witsch), 1991 を用いた。本文中の引用には、巻数とページ数のみを記した。

- 1) この本が出版された経緯について Bronsen, David: Joseph Roth Bibliographie, Köln(Kiepenheuer & Witsch), 1993 S.138-139 に詳しい記述がみられる。
- 2) 3) 4) 5) 4, S.149
- 6) 7) 4, S.168
- 8) フレデリック・ドルーシュ総合編集, 井上克己訳『ヨーロッパの歴史』(東京書籍) 1994, 312頁
- 9) 2, S.857
- 10) 4, S.182-183
- 11) 4, S.183
- 12), 13), 14) 4, S.185
- 15) 4, S.183
- 16) 4, S.186
- 17) 4, S.189
- 18), 19) 4, S.190
- 20) 4, S.188
- 21) Wunberg, Gotthart: Joseph Roths Roman "Hotel Savoy" (1924) im Kontext der Zwanziger Jahre, In: Kessler, M./Hackert, F. (hrsg.); Joseph Roth, Stauffenburg (Brigitte Narr), 1990, S.450
- 22), 23), 24), 25) 4, S.193
- 26) 4, S.194
- 27) 4, S.195
- 28) 4, S.226
- 29) 4, S.192
- 30) S.199
- 31) 4, S.161
- 32) 4, S.151
- 33) 4, S.168
- 35) Wunberg, G., a.a.O. S.452
- 36) 4, S.220
- 37) 4, S.226
- 38) 4, S.227
- 39) 4, S.234
- 40) Wittlin, Jozef : Erinnerungen an Joseph Roth, In: David Bronsen (hrsg.); Joseph Roth und Tradition, Darmstadt (Agora), 1975, S.25
- 41) 2, S.951

- 42) 4, S.203
- 43) Struc, Roman S. : Die Slawische Welt im Werke Joseph Roths, In : David Bronsen(hrsg); Joseph Roth und Tradition, Darmstadt(Agora), 1975, S.320
- 44) Wittlin, J., a.a.O.
- 45) 4, S.154
- 46) Wunberg, G., a.a.O. S.454
- 47) Struc, Roman S., a.a.O.
- 48) 3, S.3
- 49) 4, S.203
- 50) 4, S.234
- 51) 野村真理『西欧とユダヤのはざま』南窓社 1992 157頁
- 52) 同上, 162頁
- 53) 同上, 157頁
- 54) 2, S.872
- 55) 2, S.865
- 56) 2, S.872
- 57) Kesten, Hermann : Meine Freunde, die Poeten, Frankfurt a. M./Berlin/Wien(Ullstein), 1980, S.193
- 58) a.a.O. S.163
- 59) 2, S.874
- 60) 2, S.875
- 61) 4, S.204
- 62) 4, S.226
- 63), 64) 4, S.227

参考文献

- Beller, Steven : Wien und die Juden, Wien/Köln/Weimar(Bohlau), 1993
- Bronsen, David : Joseph Roth. Eine Biographie, Köln(Kiepenheuer & Witsch),1974
- Bronsen, David(Hrsg): Joseph Roth und Tradition, Darmstadt(Agora),1975
- Kahn, Lothal : Between Two Worlds, Iowa(Iowa State Uni. Press),1993
- Kesten, Hermann : Meine Freunde, die Poeten, Frankfurt a. M./Berlin/Wien(Ullstein),1980
- Spiel, Hilde : Glanz und Untergang, München(List),1987
- 植村邦彦『同化と解放』平凡社 1993
- 野村真理『西欧とユダヤのはざま』南窓社 1992
- 訳文は、主として下記の翻訳に依った。
- 平田達治, 佐藤康彦訳『ヨーゼフ・ロート小説集3』鳥影社 1993
- 平田達治, 吉田仙太郎訳『放浪のユダヤ人』法政大学出版会 1985